

昭和のテレビ物語：第6話【お笑いタッグマッチ】

2022.8
冗句大学笑学部 毛減狂寿(高橋揚一)



ミシミレドレツレレ、シッシシラソドッドド、フィフィ〜イ。毛減先生今晚は。
やあ今晚は、元気かね？ 何でも考えかんでも知って、何でもかんでもやってみよう。さて今日は…。

1959年から1967年まで金曜日の昼12時15分から30分間、フジテレビから『お笑いタッグマッチ』が放映されていた。

司会の春風亭柳昇のトロンボーンの演奏に始まり、当時の若手真打落語家6人が3人ずつ紅白に分かれて座っていた。中央の司会の両脇にレギュラーが、左奥から、三遊亭小円馬、金原亭馬の助、三笑亭夢楽、右奥から、桂伸治、柳家小せん、春風亭柳好の順に座っていたように思えるが確信はない。ほかにゲストの歌手が2名出演し、歌を披露して歌詞の中から3つの語句を選んでもらい、それを中に入れて紅白それぞれ3人で小話を作ってリレーしていく展開だった。三遊亭小円馬の「おとつあん。なんだ息子」から始まるパターンがほぼ定着していた。



小せん 柳好 伸治 小円馬 夢楽 馬の助

司会の春風亭柳昇は前回の牧野周一とは違った風情の間の天才。
「わたくしは春風亭柳昇と申しまして、大きなことを言うようですが、今や春風亭柳昇と言え、我が国では……わたし一人でございます…」

高座ではこの口上に始まり「我が国では…」でクスクス笑いが始まる。
「おい与太郎、お前も良い年なんだから、ちっとはましなことをひとつでもやってみようよ…俳句なんかどうだい」

「じゃあ朝顔」

「いいねえ朝顔かい」

「朝顔を洗うは年に二〜三回」

「そんなんじゃどうしようもないね…初雪や二の字二の字の下駄の跡」

「ならおいらは…初雪や大坊主小坊主おぶさって転んで頭の足跡一本歯の下駄の跡」

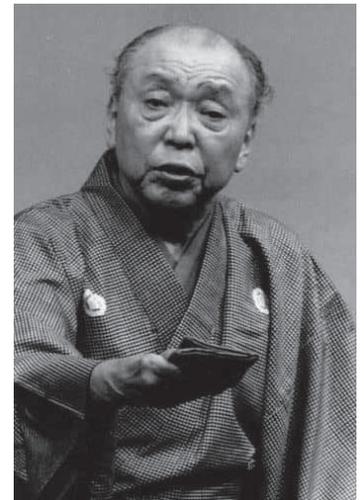
昭和の頃には「柳昇ギャルズ」と称される女子大生の親衛隊に取り巻かれるほど人気だった。桂歌丸は中学時代に二つ目だった春風亭柳昇の落語を聞いて自分も落語家になろうと決心したという。桂歌丸の師匠桂米丸や古今亭今輔にも類似した新作落語のクスクス笑いがあった。

ところで『お笑いタッグマッチ』といえば、スポンサー丸美屋食品の「のりたま」のCM。初代は桂小金治。「のりたま」に続いて「牛肉すきやきふりかけ」のCMも。「オー、フジヤマ、スキヤキふりか〜け〜」だったかも。

師匠桂小文治の公認で松竹、東宝、日活の映画出演やNHKテレビ『ポンポン大将』主演やフジテレビ『日清オリンピックショウ地上最大のクイズ』、テレビ朝日『桂小金治アフタヌーンショー』の司会などを担当し、真打に昇進することなく俳優やタレントとして活躍する毎日だった。



トロンボーン演奏



春風亭柳昇



桂小金治のCM

以上